

クリスマスイブの思い出

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

中学2年生の時の降誕日前夜。当時通っていたソウル市内の教会の先輩たちとともに、楽譜や懐中電灯を手にしてキャロリングに出かけました。手袋やマフラー、帽子は基本で、靴下は二枚重ねて履くなど各々それなりの工夫はしましたが、氷点下の寒さで手足が冷えて、顔も凍りつくような厳しい天気でした。

しかし、この日のミッションは「夜中まで仕事をしておられる方々とクリスマスの喜びを分かち合おう」という、大げさなものでした。今思えば、そのようなミッションの意味などしっかり理解していたとは思えません。おそらく、友たちとワイワイ歌い歩きながら楽しみ、その後教会の会館で始まる夜明かしのパーティーを待ちきれずにいたと思います。教会の庭で出発の祈りをしてから、いよいよ学生部のメンバーらは何組かに別れて出発しました。ある組は交番のお巡りさん、お店や屋台のおばさん、ある組は通りかかる人々、私の組は降誕日の夜限定で延長運行するバスの運転手と、車掌のお姉さん（正式名称は「案内嬢」でした）が対象でした。手書きのカードと一緒にミカンやキャンディ、お菓子、ガムなどを包んだ小袋をクリスマスプレゼントとして手渡ししながら、「メリークリスマス」と挨拶を交わす、という手順でした。誰もが嫌な顔は見せず、喜んで受け取ってくれました。

それでも、私は小声しか出ず、照れくさくて、実際に手渡し役は先輩にお任せでした。小袋がわずかに残った時、先輩に背中を押されて私にも手渡しの出番が回ってきました。バスが止まり、扉から降り立ったお姉さんに「あの、これ」と…小声で…。すると、元気いっばい声が返ってきました。「頑張ってるね。本当にありがとう！」と言いながら、私の両肩を固く抱きしめてくれました。結局、キャロリングの崇高なミッションはどこかに飛んでしまい、逆に私が励まされたキャロリングでした。ほっぺたがピンクになっていたあの時のお姉さんは、今どこにおられるでしょうか。今なら少し大声で言いたい。「あの夜、ありがとうございました」。